

Newsletter

2011 March No, 15



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

「顔認知」学の面白さ

Face Perception and Recognition in Humans.

柿木隆介

Ryusuke Kakigi

自然科学研究機構生理学研究所教授・総合研究大学院大学教授

Professor, Department of Integrative Physiology, National Institute for Physiological Sciences and The Graduate University For Advanced Studies.



「相貌失認」という不思議な症状がある。他のもの、例えば、椅子でも机でも電車でも、また人体でも手や足はすべて正常に分かるのだが「顔」だけがわからない。だから、病室に奥さんが見舞いに来ても誰だかわからず、「あなた、今日の具合はどう？」と声をかけられて初めて自分の妻だとわかるのである。脳の側頭葉という部分の下面の一部に、顔を認知する特殊な神経細胞（ニューロン）が集まっている場所がある。ここは「紡錘状回顔領域」と称されているが、たまたまこの部分が、脳腫瘍や脳卒中によって傷害されると、こういう不思議な症状がおきるのだ。ところが、最近の研究で、実は先天的に相貌失認を多少とも有している人が結構たくさんいることがわかってきた。つまり、顔が全くわからない訳ではないが、他人の顔の区別がうまくできなかつたり、他人の顔をうまく記憶できなかつたりする人達で、人類全体の2～3%

という統計もあるほどだ。考えてみれば、私達は自分が見ている他人の顔の認知能力の程度などは考えた事も無く、「こういうものだ」と思い込んでいるから、先天性に異常があっても気づかない。このエッセイを読んで、思い当たる方もおられるかもしれない。相貌失認のような特殊な場合に限らず、「顔認知」は非常に興味深く、近年、研究が非常に進んできた。

そのような流れを受けて、平成20年度から、文科省新学術領域研究の第1号として、「学際的研究による顔認知メカニズムの解明（略称「顔認知」）」が発足し、私が領域代表者をつとめている。実は顔認知の研究は様々な分野で行われており、まさに学際的なものだ。例えば工学では、表情を作る筋肉の動きを詳細に解明し、その人が笑顔を見せた時だけにスイッチが入るシステムが実用化されてきた（筑波大学）。心理学では、顔認知が極めて重要なテーマである。最近では、赤ちゃんが覚醒している時の脳活動をリアルタイムに計測する機器も開発され、赤ちゃんがいつ頃から顔を認知するか、表情の見極めはいつ頃で、脳のどの部分に関係しているか、母親顔の認知はどのようにしているか、といった事が次々に解明され、新聞などでも大きく取り上げられている（中央大学と生理学研究所の共同研究）。基礎医学では、サルを用いた顔認知の研究が日本では盛んに行われており、世界をリードしている。また、近年、脳を全く傷つけない画期的な手法（機能的MRI、近赤外線分光法、脳磁図等）が開発されたことで、人間を対象とした研究が急激に進むようになった。ちなみに、上述した赤ちゃんの研究は近赤外線分光法を用いたものである。臨床医学における大きな話題は自閉症である。自閉症患者さんは様々な症状を示すが、臨床現場の方々の共通した認識は「顔を見ない」、「目を合わそうとしない」傾向があることである。「顔認知」領域の最近の研究により、自閉症患者さんでは明らかに顔認知が健常者と異なっている事が明らかになってきた。「相手の気持ちがわからない」のが自閉症患者さんの特徴であるが、その大きな要因の1つが、他人の表情を理解する能力が低いということが分かってきたのである。「目は口ほどに物を言い」が通じないのである。

以前から、西洋人にとっては「日本人の顔は似通っていて区別がつきにくい」と言われてきた。私達はすぐに「どうせ日本人は凹凸が少ない醜い顔だから」などと、自虐的に考える。しかし、そうでは無いのだ。私達は、小さい時からたくさん見てきた民族の顔の見分けが非常に高まる能力を持っている。多数のサルがどこにいたのか全くわからない。ところが、日本人30名を相手に初めて授業しても、1時間もすれば、だいたい顔は覚えらる。一気に移動してもすぐに見つける事ができる。逆に、マラソンで全く同じユニフォームを着て背格好も同じくらいのアフリカの選手10名が集団で走っていると、私達には見分けは非常に難しいが、ケニア人やエチオピア人には簡単に見分けがつくだろう。顔認知は面白く奥深い。

今後は、「顔認知」研究班で得られた研究成果を、どのようにして臨床応用していくか、社会にアピールしていくかにかかっている。領域代表者として、今後の2年間の責任は重大だが、「明るく前向きに」研究を進めていこうと思っている。研究者に最も必要なものは「真摯な楽観主義」だと思っているからである。

(See page 3 for English summary)

Contents

「顔認知」学の面白さ

Face Perception and Recognition in Humans.

1

第4回 京都大学—慶應義塾大学
グローバルCOE 共催シンポジウム
「トランスナショナルな心・人・社会」
参加報告

Kyoto University and Keio
University Hosted a Joint
Symposium on “Transnational
Mind, Human, and Society”

2

2010年度若手研究成果報告会
Annual Meeting for Oral
Presentations of Young
Researchers

3

2010年度プロジェクト科目報告会
Oral Presentations by Graduate
Students in Project Course 2010

Le Plaisir du beau
— 美の快楽 —

4

第1回 実験美学セミナー（第127回
バイオサイコシンポジウム共催）
「描くことの進化と発達の起源を探る
～チンパンジーとヒトの幼児の描画
行動から～」

Exploring Genesis of Evolution and
Development of Drawing
— the Drawing Behavior in
Chimpanzees and Human Children

絵画における影の描写
Aesthetic Lecture on Shadow by
Dr. Roberto Casati

5

慶應—南フロリダ大 ジョイントセミナー
参加報告

Keio-South Florida Joint Seminar 6

活動報告・研究員紹介 7

事務局だより 8

第4回 京都大学—慶應義塾大学グローバル COE 共催シンポジウム

「トランスナショナルな心・人・社会」 参加報告

Kyoto University and Keio University Hosted a Joint Symposium on “Transnational Mind, Human, and Society”

(1月9日 京都大学時計台記念館2階 国際交流ホールI&II)

2011年1月9日、京都大学吉田キャンパス百周年時計台記念館にて、「第4回京都大学—慶應義塾大学グローバル COE 共催シンポジウム：トランスナショナルな心・人・社会」が開催された。本シンポジウムは一般公開され、当日、会場は一般、学生等、多くの聴衆で賑わった。

まずオープニングセッションでは、「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー子安増生教授（京都大学）から本シンポジウムの主旨が説明された。ここでは「トランスナショナル」というシンポジウム全体のキーワードについて議論された。特に国と国との関係（Inter-national）に留まらない、人と国、組織と国などの様々なレベル間の関係（trans-national）をも取り込んだこのトランスナショナルな関係をどの様に捉えていくべきかについて、本シンポジウムの全体に関わる問題提起がなされた。

その後の講演は第一部、第二部に分けて行われた。第一部では、慶應義塾大学文学部山本淳一教授の司会の下、慶應義塾大学、京都大学の両 GCOE のプロジェクトにて研究を行う若手を中心に発表が行われた。第一発表者の慶應義塾大学先端研究センター研究員佐治伸郎氏の発表は「異なる語彙化パターンを持つ第二言語の習得：日本語及び韓国語母語話者の中国語語彙習得を事例として」と題し行われた。ここでは日本語、韓国語という異なる母語を持つ中国語学習者が中国語語彙を学ぶ際、どの様に母語知識の干渉を受けるのかを実験的に調査した成果が報告された。続いて同じく慶應義塾大学先端研究センター研究員濱雄亮氏の発表は「新療法の輸入と土着化：糖尿病医療におけるカーボカウントを事例として」と題し行われた。カーボカウント療法とは炭水化物の量を調整し血糖値をコントロールするという、糖尿病における新しい療法である。日本に輸入されて日が浅いこの療法が、どのように医療関係者及び糖尿病患者に受容されていったのかに関して、綿密な実地調査の結果が報告された。第一部の最後に、京都大学教育学研究科博士課程の赤上裕幸氏による「越境する文化政策—満洲の映画教育政策を中心に—」と題された発表が行われた。ここでは昭和初期に日本本土で活発となった教育政策の一環としての映画が、その後満洲へと展開の場を移し、更に戦後日本に帰ってきて新しい文化として定着していく過程が発表された。特にここではある文化が特定の時代背景、また政策の影響の下で社会の中でどのように成熟され、またそれがどのように変容していくのかが議論された。第一部の三つの発表は発表者それぞれの専門の視点からの研究発表でありながらも、心、社会、文化それぞれの側面において国や政府を介さない人間同士のトランスナショナルな

関係がどう形成されていくのかを考える題材を提供し、聴衆との議論を深めることができた。

第二部では、京都大学大学院教育学研究科杉本均教授の司会進行の下、まず慶應義塾大学経済学部杉浦章介教授から「トランスナショナル化とパワーの変質」と題された発表が行われた。ここでは国対国、政府対政府というような従来の枠組みでは捉えることのできないような、個人対企業、企業対国、または個人対国といった、正にトランスナショナルというべき対立や協同の事例が豊富に紹介された。またそのような非対称な関係が成立する中で、今後パワーという概念をどのように取り扱っていくべきかという意義深い問題提起がなされた。続く京都大学こころの未来研究センター内田由紀子助教の発表では、「幸福感と対人関係の文化的基盤：日米比較文化研究からの視点」という題で、様々な文化圏における「幸福感」の比較はいかにして可能かという発表が行われた。上記のようなトランスナショナル化が進む社会にあって、どのようにして人間の感情や想いを捉え、評価していくことが可能かという問題意識は本シンポジウムの主旨全体に通じるものであり、会場では活発な議論が行われた。このように、第二部における二発表は、世界のトランスナショナル化の問題とより直接的に結び付いた、非常にダイナミックな観点からの議論を提供し、聴衆の深い共感を呼んだ。

本シンポジウムのクロージングセッションでは、司会の杉本均教授が世界のトランスナショナル化という巨大な問題について、それぞれの研究者がそれぞれの研究分野においてこの問題をどう捉えるかを考えていくことの重要性を説いた。本シンポジウムは、正に杉本教授の言葉通り、様々な分野の研究者が様々な視点からトランスナショナル化というテーマを考え、議論し、多くの人々と問題を共有する非常に重要な機会となったと言える。

(佐治伸郎)

On January 12, 2011, the fourth joint GCOE symposium of Kyoto-Keio University was held at Kyoto University. The title of the symposium was “Trans-national Mind Human and Society.” Five researchers each of who has different specialized field reported their latest studies and discussed how they can propose the essence of “trans-nationalization” from their own viewpoint, psychology, anthropology and economics. The symposium could propose unique and fruitful discussion to ponder over the forthcoming transnationalized world.



2010 年度若手研究成果報告会

Annual Meeting for Oral Presentations of Young Researchers

(2月8-9日 三田キャンパス東館6階G-SECLab)

毎年、年度末に行われる若手研究成果報告会が2011年2月8、9日の二日にわたって東館G-SECにて行われた。第3回目となる今回の報告会では、特別研究教員が30分枠、非常勤研究員が20分枠で最新成果の口頭発表そして質疑、討論を行った。

まず初日の午前中には、遺伝と発達班から2名、言語と認知班から3名の報告が行われた。遺伝と発達班からはGCOE-CARLS施設で行う乳児の脳機能および行動学的研究、慶應大学病院小児科との新生児についての共同研究、CARLSと提携のあるフランスENSとの共同研究、大脳皮質活動と循環器活動の因果関係を検討したNIRS-EEG(脳波計)同時計測研究の成果等が報告された。言語と認知班は第二言語を学ぶことが母国語能力へ与える影響についての脳科学的研究、第二言語を獲得する際の普遍文法(UG)の役割についての実験的検討、オノマトペの音象徴性についての対照言語研究についての報告がなされた。外国語習得という身近なトピックについて素朴な疑問から専門的なことまで熱心な討論がなされた。午後の部では、まず論理・情報班の3名より「事実とは知覚されるか」「志向性の対象説」といったテーマについての発表に加え、心理学者Sullyの「心ある機械」としての主体概念の形成についてフロイトの概念と対照化させながらの考察がなされた。引き続き、脳と進化班より7名の発表が行われた。まずはCARLSのマーモセット・ラボそしてつくばカラス生態研究施設から得られた成果が報告された。カラスが社会的順位性を形成するという知見に加え、羽づくろいは優位性の高い個体が低い個体へ優位性誇示のために行うといった極めて興味深い結果が報告された。この他にもfMRIを用いた表情表出やアハ体験についての脳機能研究等が報告された。5つの班から構成される本拠点ならではの分野を超えた質問が飛び交い、執筆者も普段使わない新規の脳内回路(?)を開拓したような1日であった。

二日目は午後から脳と進化班6名および哲学・人類学班7名による報告会が行われた。前半は、脳と進化班による報告からはじまった。5名がMRIを用いた神経科学研究に基づく報告を行った。知覚学習を用いた脳の可塑性モデルの提示にはじまり、探索的意思決定や間接発話理解といった高次脳機能研究や、身体内部の知覚過程と個人特性との関わり認知神経科学研究に加え、脊髄解剖画像撮像技法の開発まで、MRIを使用した多岐にわたる研究が報告された。また、同じく脳と進化班から学習理論に関する種を超えた比較が行われた。それぞれの研究に対して、技術的な側面から今後の研究の発展方向に関してまで討論が交わされた。

後半は哲学・文化人類学班からの7名が報告を行った。医療人

類学の立場からは、3名が、糖尿病患者を対象とした理想の患者像の分析や、同じく糖尿病医療現場における身体技法を用いた学習過程についての考察、また音楽療法における即興という新たな試みについて報告した。身近な問題でありながら、実態を伺うことが困難な医療現場について、専門家からも他分野からも活発な質問があがっていた。また美学の立場からは、絵画印象における違和感について実験美学的研究報告を行い、これにも知覚心理学など領域を超えた立場からも意見が交わされた。哲学の立場からは3名が報告を行った。従来証明において用いられていた順序数を用いない、新たな証明技法の開発、三次元主義と四次元主義を定式化する試みの提案、デリダによる動物論の考察が行われた。

2日間にわたり28名の報告が行われた。「論理と感性」という枠組みはあるものの、報告内容は非常に多岐にわたるものであり、この多様性が本拠点を特徴づけている点のひとつと言える。多くの活発な討論が交わされたが、本会の場のみでなく、今後も他分野との交流により研究の発展が望まれる。来年度は拠点の最終年度である。それぞれの研究の集大成が期待される。

(増田早哉子・皆川泰代)

The third annual meeting for oral presentation of young researchers was held in G-SEC Lab in East building, Mita campus, Keio University (Date: February 8th-9th, 2011). In this meeting, young researchers including associate professors, assistant professors and researchers in CARLS reported their recent activities and study results. This was a very precious occasion as researchers from different fields involving neuroscience, genetics, psychology, philosophy, linguistics, anthropology and logics gather together and discuss each topic in an interdisciplinary fashion. The two-day session demonstrated that a wide variety of researches to clarify the human activities are under investigation in CARLS in the light of 'logic' and 'sensitivity.'



1 ページ目の英訳 “Face Perception and Recognition in Humans.”

We frequently see other people's faces in our daily lives, and remember who they are, feel how beautiful or ugly they are, or imagine what they are thinking by looking at their facial expression or eye movement. Since we perform this automatically and unconsciously, we usually never consider how complicated a neural process this is. To investigate this interesting research topic in more detail, a new large-scale research project, “Human face perception and recognition,”

was started in 2006 and will conclude in 2012, supported by Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas supported by MEXT KAKENHI. Many researchers in various fields such as engineering, psychology, cognitive science, brain science, basic medicine (physiology and anatomy) and clinical medicine (pediatrics, neurology, neurosurgery, psychiatry) are members of this project, and cooperate in studies to clarify how our brains perceive and recognize faces.

2010年度プロジェクト科目報告会

Oral Presentations by Graduate Students in Project Course 2010

(2月7日 三田キャンパス大学院校舎325B)

2011年2月7日(月)、2010年度プロジェクト科目報告会が行われた。まず慶應人文グローバルCOE 拠点リーダーの渡辺茂教授より挨拶があり、その後、それぞれのプロジェクト履修者から報告があった。まずプロジェクトAの松田壮一郎氏(タイトル: Mechanisms of limitation-a near infrared spectroscopy (NIRS) study-)、佐藤有理氏(タイトル: オイラー図・ヴェン図を用いた図形推論のfMRI研究)、玉田圭作氏(タイトル: 我々はどうマンガを読んでいるのか? 4コママンガ読解時の眼球運動を通じて-)より報告があった。次にプロジェクトCの吉原友美氏・永井敦氏・桃生朋子氏(タイトル: 日本語形容動詞における空コピュラ「の」)より報告があり、休憩を挟んでプロジェクトDの山根千明氏(タイトル: 会が印象における明暗コントラストと違和感)、大沼麻実氏(タイトル: アルコール依存者をAAへとつなげる中間施設マックのプログラム)の報告があった。最後にプロジェクトEの北村直彰氏(タイトル: Supersubstantialismの検討-形式的存在論的観点から-)より報告があった。報告終了後、それぞれのプロジェクト責任者から講評が述べられた。その後、社会学研究科委員長の杉浦章介教授より挨拶があり、最後に杉浦教授より履修者に修了証が授与された。

プロジェクト科目の目的は、分野の垣根を越えた議論を実現することにより、自身の研究のさらなる発展を促すところにある。この目的を果たす過程で生まれる利点は多々あり、例えば様々な視点を融合させることで、新たな興味深い視点を生み出す点、自身の研究を客観的に見直せる点がある。特に後者は重要かつ見落としがちな点であり、今回の報告会を通し、その重要性に改めて気付かされた。(桃生朋子)

A debriefing session for “Project Course 2010” was held on the 7th of February, 2011. After seven oral reports of multi-disciplinary topics, each student was awarded a certificate of completion.



Le Plaisir du beau

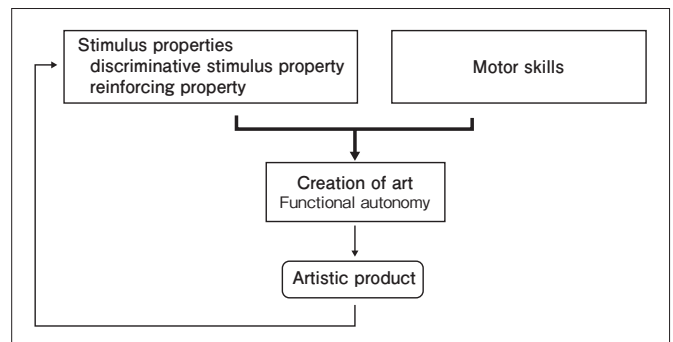
美の快樂

(2月13-14日 パリ第10大学)

2011年1月13、14日にパリ第10大学(Nanterre)において表記シンポジウムが行われた。ま、極めてフランス的なテーマというべきか。このシンポジウムは一般公開されず、ごく少数の研究者のみによる討論に十分時間をかける形式でおこなわれた。Nanterre大学はパリ中心から30分程度の所の新興地区であるNanterre La Defenceにある比較的新しい大学で、Kreutzer教授率いる動物行動学の大きな研究室があり、今回のシンポジウムは哲学者であるHoquet教授とKreutzer教授が全体の統括を行った。講演者は哲学者、科学史研究者、動物行動学者、分子生物学者、心理学者、神経科学者、文化人類学者など多岐にわたる。シンポジウムの副題は「ヒトと動物における美的感覚と性選択」となっており、進化美学がひとつの中心テーマであった。僕は「動物美学」というタイトルで、美の弁別刺激効果、強化効果、運動技能という話をし、最後に美の創造という話をした。創造においては、動物に絵を描かすことはできるが、それが機能的自律性(functional autonomy)を持っているか、また作品が強化効果を持ち得るかという点が重要になる。話が噛み合わないのではないかと心配していたが、意外に密度のある討論ができた。これはフランスの研究者がそれぞれかなりの教養を身につけているからであって、先端的な研究はしていてもちょっと離れた話になると全くついてこれない米国式の研究者との大きな違いであろう。僕は個人的にはどちらかというとドイツ文化に馴染んできたが、一昨年にエコル・

ノルマルで講義をしてからフランス式の知性の在り方にも興味を覚えるようになった。今後、若手研究者が海外連携拠点との交流を利用して多様な知の在り方にも目を向けてもらえればと思う。(渡辺茂)

A symposium entitled “Le Plaisir du beau” (The pleasure of beauty) was held at Nanterre, France. Topics such as aesthetic senses and sexual selection were discussed from diverse perspectives.



美的刺激は弁別刺激効果と強化効果を有する必要がある。美の創出にはさらに運動技能が必要になり、この製作活動が自律的に、すなわち、他の餌強化などではなく自己強化によって維持されなくてはならない。最終的には、作成された物が自分や他の同種他個体にとって美的刺激としての性質を持たなくてはならない。この最終段階はヒト固有と考えられる。

第1回 実験美学セミナー（第127回 バイオサイコシンポジウム共催）

「描くことの進化と発達の起源を探る～チンパンジーとヒトの幼児の描画行動から～」

Exploring Genesis of Evolution and Development of Drawing — the Drawing Behavior in Chimpanzees and Human Children

（12月6日 三田キャンパス東館4階セミナー室）

2010年12月6日、三田キャンパス内で京都大学野生動物研究センターおよび東京藝術大学の研究員齋藤亜矢博士をお招きして、第1回実験美学セミナーが開催された。当日は本学内外より多数の参加者が集まった。齋藤博士は、京都大学霊長類研究所の天才チンパンジーとして知られるアイちゃんなどを対象に描画行動を実験的に研究してきた。同時にヒトの幼児でも同様の観察を実験的に試みている。

今回の発表では、齋藤博士が長年取り組まれてきた実験結果から、絵を描くことの認知的な基盤とは何かという大きなテーマについてお話いただいた。描画行動の進化・発達の起源を、チンパンジーとヒト幼児を対象とした比較認知的な研究である。絵筆を器用に操作しながら具体的な物の形（表象）を描こうとしないチンパンジーと、なぐりがきから表象描画に移行する時期のヒトの相違はどこにあるのか。刺激図形を用いた課題からはイメージの想起や補完との関連が示唆された。

チンパンジーでも筆遣いのタッチや色の配置などの特徴、いわゆる画風のようなものがある。なぐり書きのようで、しかしそこには「個性」を感じさせる。しかし、チンパンジーは具体的な物を描くことはない。それを、齋藤博士は、線をひく手の動きを上手く調整できないという技術的な問題、何らかの認知的な問題、あるいは描こうとしないだけという意欲の問題としてとらえ、ヒ

トの幼児の描画行動と比較しながら明らかにしていこうとする。顔のパーツが欠けている線画に、どのように線や点を書き加えていくかをみる「画竜点睛」課題からは、チンパンジーの線を調整して描くための技術的な問題よりも、「ないもの」を補うことができない、という認知的な問題の方が関わっていることが分かってきたという。

チンパンジーとヒト。それらが進化的に分れたのは600万年ほど前だ。「描く」という行為から垣間見える心の進化とは、表象がどのように獲得されていたかということであり、その問題提起は、多くの参加者の心をつかみ、活発なディスカッションが行われた。

（川畑秀明）

The 1st seminar on experimental aesthetics was held on December 6th at Keio University. Dr. Saito from Kyoto University had a talk about her studies on drawing behavior in Chimpanzees and human children based on comparative cognitive science.



講演会

Aesthetic Lecture on Shadow by Dr. Roberto Casati

絵画における影の描写

（1月25日 三田キャンパス6階G-SECLab）

2008年に引き続き、哲学・文化人類学班ではNational Center for Scientific Research (CNRS、フランス・パリ)のロベルト・カザーティ氏を招聘した。氏は領域横断的かつ多面的に「影」を研究され、その著書のひとつ *The Shadow Club* (2000) は7カ国語に翻訳されるほど幅広い読者を得ており、現代を代表する「影」研究者の一人である。

この機会のために特に用意されたテーマは、美術史の文脈において「影」に注目する研究者として氏と深い親交をもつ文学部教授・遠山公一とのやりとりによって決定された。それは、絵画イメージにおける「正しく見えるが現実には誤っている影」と「誤っているように見えるが現実には正しい影」の指摘および認知心理学に基づく検証である。大抵の場合、われわれは絵画イメージに描き込まれた影を当然と思いがちだが、氏によれば、実はこれらの影には、現実どおりの正しい影と、現実には誤っている影が指摘できる。そもそも、影の描写は光・形・位置などさまざまな問題をまんべんなく解決した上に実現される、きわめて高度な技術である。したがって、描かれたイメージに現実との齟齬が生じ、そのわずかな誤りのために絵画の全体的な印象が損なわれてしまうことも珍しくない。とはいえ、影の描写が自然科学的に誤っていればイメージが不自然に感じられ、正しければ自然に感じられるというわけでは必ずしもないのだ。氏は、未だ明らかになって

いない「影」の知覚のメカニズムを、前日に訪れたという浅草や浜離宮恩賜庭園で撮影した写真も実例として織り交ぜながら、体系的かつ実証的にご紹介くださった。

講演は2時間にわたり、その後の質疑応答もきわめて熱心かつ活発に行われ、2度の休憩時間は教員・学生問わずそれぞれの関心に基づいて個々に氏と意見を交わすことのできる貴重な機会となった。きわめて有益かつ濃密な時間を、来場者全員が共有できたと言えよう。氏は2月末にも来塾・講演されるが、今回とは視点を異にする新たな「影」がまたひとつ浮かび上がるであろうと期待される。

（山根千明）

Dr. Roberto Casati, one of the representative researchers of shadows in the world, lectured on the newest problems of the shadows in visual images and the mechanism of their perception.



ジョイントセミナー参加報告 Keio-South Florida Joint Seminar

(1月28-29日 南フロリダ大学)

2011年1月28日、29日にかけて、慶應—南フロリダ大ジョイントセミナーが南フロリダ大学で開催された。慶應 CARLSからは渡辺拠点リーダー、一方井、八賀、加藤、四本の5名が参加した。ホストである南フロリダ大学清水教授の挨拶ののち、心理学部長、医学部長より開会の挨拶と、南フロリダ大学の紹介が行われた。初日は慶應側の参加者が発表を行った。渡辺教授より慶應義塾大学の紹介が行われ、続けて渡辺教授の共感に関する研究発表が行われた。その後、セキセイの闘争後親和行動（一方井）、行動分析学における強化（八賀）、ジュウシマツの歌学習と遺伝子の関係（加藤）、ヒト視覚系の認知機構とその可塑性に関する研究成果（四本）について発表を行った。2日目は南フロリダ大学の心理学系、生物学系、医学系と多様な研究室の研究者たちが、アルツハイマーの進行と物理的脳障害との関連、家雀の個体間での表現系の違いを生み出す可塑性の探索、飲酒と社会性の関係、視覚認知、脳梗塞モデル動物の分子生物学的解析に関する研究発表を行った。多様な研究分野の発表にもかかわらず、それぞれが少しずつ関連しているように感じられ、研究室間、学問間の垣根が低く感じられた。慶應CARLSも同じ形態であり、今後も南フロリダ大学との交流が続くことでお互いに刺激し合えるものと思われる。南フロリダ大学は規模も敷地もケタ違いであり、ラボツアーでいろいろな研究室を見学させていただいたが、学問的な刺激だけでなく良い運動にもなった。

(加藤真樹)

2011年1月28、29日の二日間にわたり、南フロリダ大学で慶應—南フロリダ大学合同セミナーが開催された。南フロリダ大学とは2008年より国際協定を結んでおり、合同セミナー開催は昨年度に続き第二回目である。本拠点からは拠点リーダーの渡辺のほか4名が参加した。セミナー出席者はおよそ25名程であった。

初日は南フロリダ大学心理学科長 Michael Brannik 博士及び、Center of Excellence for Aging and Brain Repair (CABR) 所長 Paul Sanberg 博士の挨拶から始まり、本拠点リーダー渡辺が開催の辞に替えて自らの研究を紹介した。続いて、南フロリダ大学の清水透博士が議長を務め、一方井、八賀、加藤、四本が順に各50分の時間で研究発表及び質疑応答を行った。昼食時にはレストランの長机を囲みセミナー出席者で懇談を行い、午後は南フロリダ大学の複数のラボの研究施設を見学させて頂いた。2日目はCABRのCesario Borlongan博士が議長を務め、南フロリダ大学の5名の若手研究者が発表を行

い、昼過ぎに解散となった。

本セミナーは若手研究者の交流、発表の機会を与えることを目的の1つとしており、南フロリダ大学の研究者の発表時には、ご厚意により日本人研究者が優先的に質問をする機会を与えて頂くなど、教育的配慮を感じるセミナーであった。また、両大学の発表者は様々な研究的出自を持っており、研究テーマ、目的意識、研究手法などの異なる多種多様な発表を拝聴する機会となった。自分と異なる専門領域と互恵的な学術研究を行うことは簡単ではないと感じる一方、それを実現させるための取り組みの一つが目の前に展開された。まだ萌芽的であるが、小さな芽を今後大切に育てることが必要かつ有益となるであろう。

(八賀洋介)

On January 28th and 29th, under a joint psychology and neuroscience research initiative, five researchers from CARLS, and researchers from the University of South Florida convened a two-day joint seminar to discuss their work in psychology and neuroscience. The CARLS researchers and five USF researchers presented their researches. Seminar topics included presentations on animal cognition, gene expression changes in the songbird brain, the scope of differential reinforcement, and neuroimaging study of visual processing. The seminar was followed by a social luncheon and a tour of several USF neuroscience / psychology laboratories. Researchers from both institutions enjoyed this exciting opportunity of expanding their academic and cultural perspectives.

(四本裕子)



活動報告

タイトル	開催日・会場	主催・共催・企画	企画者	講演者・参加者
第1回実験美学セミナー 描くことの進化と発達の起源を探る～チンパンジーとヒトの幼児の描画行動から～	12月6日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	脳と進化班 共催：第127回 バイオサイコシン ポジウム	川畑秀明	齋藤亜矢(京都大学野生動物研究センター/東京藝術大学)
医療人類学の最前線ⅠV:ケア・基準・味覚	12月11日 三田キャンパス南館5階 ディスカッション・ルーム	哲学・ 文化人類学班	宮坂敬造	Annemarie Mol (University of Amsterdam) 鈴木晃仁(塾内経済学部)、宮坂敬造、モハーチ・ゲルゲイ (哲学・文化人類学)
アリストテレスの学問的知識の構図	12月13日 三田キャンパス 南館2B35教室	論理・情報班	納富信留	高橋久一郎 (千葉大学)
第4回 京都大学ー慶應義塾大学グローバル COE 共催シンポジウム「トランスナショナルな心・人・社会」	2011年1月9日 京都大学時計台記念館2階 国際交流ホールⅠ&Ⅱ	全体	子安増生 渡辺茂 山本淳一	子安増生、内田由紀子、赤上裕幸(京都大学)、杉浦章介、 山本淳一、佐治伸郎、濱雄亮(慶應義塾大学)
Keio-USF Joint Seminar	1月28-29日 南フロリダ大学	国際教育研究プロ グラム	小嶋祥三 渡辺茂	四本裕子、加藤真樹、一方井祐子、八賀洋介、 渡辺茂(脳と進化班)
Aesthetic Lecture on Shadow by Dr. Roberto Casati	1月25日 三田キャンパス 東館6階G-SECLab	哲学・ 文化人類学班	遠山公一	Roberto Casati (National Center for Scientific Research (CNRS), Paris)
平成22年度「大学教育改革プログラム合同 フォーラム」ポスターセッション	1月25日 秋葉原アキバスクエア 屋内スペース	全体	渡辺茂 小嶋祥三	小嶋祥三、安藤寿康、皆川泰代(遺伝と発達班)、 モハーチ・ゲルゲイ(哲学・文化人類学班)
プロジェクト科目報告会	2月7日 三田キャンパス 大学院校舎325B	全体	杉浦章介 渡辺茂	プロジェクト科目履修者(9名)
2010年度若手研究成果報告会	2月8・9日 三田キャンパス 東館6階G-SECLab	全体	渡辺茂	特別研究教員、非常勤研究員全員(28名)

研究員紹介

濱 雄亮



2010年10月より、非常勤研究員となりました濱雄亮と申します。医療人類学の視点から病いをめぐる理念と実践について、主に1型糖尿病の当事者や関係者たちへの聞き取り調査・文献調査に基づいて研究を行っております。ここでいう「理念」とは、患者会・医療従事者・行政機関によって措定される「理想の患者像」です。「理想の患者像」は、患者以外の者から寄せられるまなざしに対する応答でもあり、病いの社会的かつ双方向的な

構築についての非常に重要なデータです。そこで、患者会主催のイベントにおける配付資料、患者会の会報誌、講演会などを資料として用いています。その上で、その資料を「実践」についてのインタビュー資料と照合することで両者の関係を読み解き、病いによる人間関係・社会関係の成立と変容の動態を解き明かしたいと願っております。

三宅博子



2010年10月より、非常勤研究員として哲学・文化人類学班に参加させて頂いている、三宅博子と申します。これまで、発達障害や神経難病を持つ人たちの即興音楽療法の実践・研究に取り組み、2010年3月に神戸大学で博士号を取得しました。西洋近代型音楽療法はこれまで、セラピストによる音楽的介入とその効果という単線的な発展の論理を暗に前提としてきました。この点を批判的に再考すると共に、人間と音楽、そして環

境との関わりの多様な可能性へ向けて開かれた臨床音楽学を構想することが現在の研究テーマです。本グローバルCOEでは、「音楽するmusicizing」ことを巡って異なる論理と感性を持つ者同士が、いかにして協働の音楽を成り立たせていくのかについて、様々な異質な要素を取り込みながら意味を生成し、変容するプロセスとして捉えることを試みます。どうぞよろしくお願ひ致します。

村井忠康



知覚における概念の役割

2010年10月より非常勤研究員としてお世話になっている村井忠康です。専門は、18世紀ドイツの哲学者I・カントの認識論と現代の知覚の哲学になります。カントは、知覚という感性の働きに対して概念という知性の要素がどのように寄与しているかという問題を、初めて自覚的に引き受けました。今では、概念主義と呼ばれる知覚論によってその問題意識は引き継がれています。しかし概念主義は、知覚を不当に知性化していると

してしばしば批判されてきました。私の現在の関心は、こうした批判から概念主義を擁護する手立てをカントのテキストのうちに探ることにあります。これは、カントが日常的経験だけでなく美的経験においても大きな役割を与えた想像力の意義を再考することにもつながりました。今後は想像力の分析を通じて、日常的経験と美的経験のあいだの連続性・非連続性といった問題についても考えていきたいと思っています。

石川哲朗



2010年10月より、非常勤研究員として人文グローバルCOEでお世話になっております、石川哲朗と申します。本塾の特別研究教授である茂木健一郎君の指導の下で博士課程に在籍し、認知神経科学を専門として研究に励んでおります。私のテーマは創造性と一回性、もうすこし平たく言えば、「ひらめきや」"Aha!" experienceの認知神経基盤を解明することです。ひらめきというのは、論理的思考や感性的なプロセスのあわいに

あるような知性のきらめきであると考えられますが、まだ十分に理解されていないその謎を明かしたいと希求しております。このような壮大な目標を立てつつ、本拠点では脳と進化班に所属して行動実験や脳機能計測を用い、曖昧な視覚刺激がある瞬間ぱっとひらめきによって見えるようになる興味深い現象を手掛かりに、その背後にある認知メカニズムを実験的に調べています。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

プレスリリース情報

慶應義塾大学グローバルCOE「論理と感性の先端的教育研究拠点」の渡辺茂教授と同学振特別研究員（グローバルCOE）の一方井祐子は、ブンチョウにも絵画の好みがあるらしいことを突き止めました。これまでに渡辺教授の研究では、ハトが訓練すればモネやピカソなどの画風を見分けることなどを報告してきました。しかしながら、これらの研究は訓練すれば絵の区別がつくことを示すものであり、絵の好みがあるかどうかは分かりませんでした。この研究は、実際の絵画を使って鳥類に好みがあることを調べた最初の報告となります。このことを2010年12月27日に慶應義塾よりプレスリリースし、日本経済新聞、朝日新聞、読売新聞など各紙で広く報道されました。

※朝日小学生小学生新聞（2011年1月8日）より転載



慶應義塾大学の渡辺茂教授と後藤和宏博士（現・京都大学）のグループは、九州大学の伊藤功准教授のグループと共同で、脳の非対称性に異常のある（左右の脳がともに右脳の性質を示すように変化した）突然変異マウスは、正常なマウスと比べて、空間記憶機能が障害されることを明らかにしました。この結果は、脳の左右の非対称性が正常な記憶機能に欠かせないことを示唆しています。マウスの記憶を司る海馬は、正常なマウスでは左

右の脳で異なる性質を示すのに対し、この突然変異マウスでは左右どちらの脳も右型の性質を示します。今回の研究は、そのような脳機能の非対称性が、正常な記憶機能には欠かせないものであることを明らかにしました。本研究成果は、科学誌「PLoS ONE」に掲載され、時事通信や日経産業新聞など各紙で広く報道されました。

活動予定

■ 第3回日中哲学フォーラム

開催日：2011年4月16・17日（土・日）

会場：三田キャンパス東館

テーマ：「グローバル化における文化・思想の普遍性と特殊性—西洋と東洋の間で」

「現代における生と死のダイナミズム—人間・生物・宇宙」

■ Introspection in humans, animals, and machines

開催日：2011年5月初旬～中旬（予定）

会場：三田キャンパス（予定）

講演者（予定）：Jerome Sackur（仏・ENS）、増田早哉子（慶應義塾大学CARLS）、後藤和宏（京都大学）、宮田裕光（学振特別研究員）他

編集後記 2010年度を締めくくる Newsletter をお届けします。

今回もシンポジウムやワークショップの報告が多数なされていますが、一つのハイライトは「美学」にあります。拠点の特色を反映して、進化、知覚、発達など複数の観点からの美学へのアプローチが見られます。近年、著名な神経科学者が美学認知について著していますが、神経科学も含めて、美学が一つのうねりを引き起こしつつあることを感じます。巻頭言では美学同様、複雑な視覚認知である、「顔」の認知について、学際的な視点から述べて頂きました。今後の人文および自然科学研究は、分野横断的な手法がますます重要になっていくでしょう。拠点の方向性の確かさが感じられます。

執筆者の皆さまには心から感謝申し上げます。

（尾島司郎）

新刊紹介

■ 2010年度成果・活動報告書

2010年度における本拠点の研究成果をまとめた報告書2冊をご紹介します。CARLS Series of Advanced Study of Logic and Sensibility, Vol. 4は事業推進担当者や特別研究教員・研究員、研究協力者らの今年度の研究成果をまとめた論文集（欧文）です。

『論理と感性の先端的教育研究拠点活動報告書 Vol. 4』は、今年度開催したシンポジウム・研究会等の布告と拠点メンバーの著書・論文、学会発表等の業績をまとめたものです。入手方法につきましては、事務局までお問合せください。



慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2011. March. No. 15

発行日 2011年3月24日

代表者 渡辺茂

〒108-0073 東京都港区三田3-1-7 三田東宝ビル 8F

TEL: 03-5427-1156

FAX: 03-5418-6728

keiocarls@info.keio.ac.jp

<http://www.carls.keio.ac.jp/>